

ネパール地震に関して第一次緊急調査を行いました(2015/7/26-30)

場所：カトマンズ、サンク

テーマ：ネパール地震、大震災対応、大震災復興

平成 27 年 7 月 26 日ー30 日に災害科学国際研究所の緊急第一次調査団として、首都カトマンズを訪問し、保健・医療、上下水道、ロジスティックスを中心とした関係諸機関への訪問・聞き取り調査を行うとともに、被害の大きかった世界遺産や近郊のサンクウ市でのフィールド調査を行いました。4 月 25 日(土)11:56 というネパールの休日昼間に起きた M7.8 の地震により、8700 名を超える犠牲者をだし、5 月 12 日には最大余震が再び大きな被害を出しました。災害が大きな規模になるほど全容を把握することは簡単ではありません。第一次調査隊派遣は、発災から 3 か月後に訪問することによって、震災に対する概要がネパールの中でも整理把握され、災害対応、復旧・復興に関してより正確な情報を得られることを目的としています。

第一次調査団は、災害医学研究部門（江川、佐々木、村上、浩日勒、服部）、災害リスク研究部門（ブリッカー）、人間社会対応研究部門（ダス）からなり、以下の日程にて調査を行いました。

7 月 26 日（日）：カトマンズ到着、ゲシュウォリ下水処理施設訪問

7 月 27 日（月）：カトマンズ・ダーバルスクエア調査、日本大使館訪問、ネパール保健省訪問（大臣、秘書官、災害保健医療担当者と面談）、トリブバン大学工学部災害科学センター訪問、ネパール国立結核センター訪問、JICA ネパール事務所訪問

7 月 28 日（火）：パタン病院訪問、同図書館訪問、アジア工科大学関係者と面談、アナプルナ病院訪問、UNDP ネパール事務所訪問

7 月 29 日（水）：ネパール感染症センター、HIV センター訪問、WFP ロジスティックスセンター訪問、ネパール交通技術学会理事長と面談、サンクウ地区調査

7 月 30 日（木）：帰国

カトマンズ市内にも世界遺産を含め多くの震災被害の爪痕が残っていますが、市民の生活はかなり復旧しているのが見て取れました。保健省は各病院、外国からの医療支援チーム（FMT）、WHO などの国際機関と共同して、災害時の保健医療対応を行い、下痢などの感染症が大流行するおそれ強くあったためラジオや SNS などのメディアを通じて積極的に衛生管理を呼びかけたことによって、感染症の流行はみられなかったということです。また、FMT に対して外傷治療マニュアルを配布し、ネパール人医師による管理を徹底したことにより四肢切断は最小限に留めることができています。入院患者・病院職員の水と食事は大きな問題となり、幸いなことにプロパンガスによる調理が継続できたため、食料支援は未調理の食材で受けて病院で調理することで食中毒は発生しなかったそうです。保健医療従事者も限られた資材、人材を最大限に活用して災害対応を行っていました。ネパールは国民一人あたりの所得は確かに低いのですが、人々の民度は高く、道路にはごみも落ちておらず、暴動や奪い合いが起きることもなく、国家としての尊厳を保ち、政治的な不安定性はあっても自分たちのことは自分たちで決めていく気概が見て取れました。

急な訪問であったにも関わらず、快く対応してくださった関係各位にあつく御礼申し上げますとともに、ネパールの人々が一刻も早く復旧・復興を成し遂げ、より災害に強い地域社会を構築されることを祈ります。



世界遺産カトマंडゥダールスクエアで崩れ落ちた煉瓦の沐浴場



ダールスクエアで学校のビルが使用できずにテントのなかで勉強する高校生



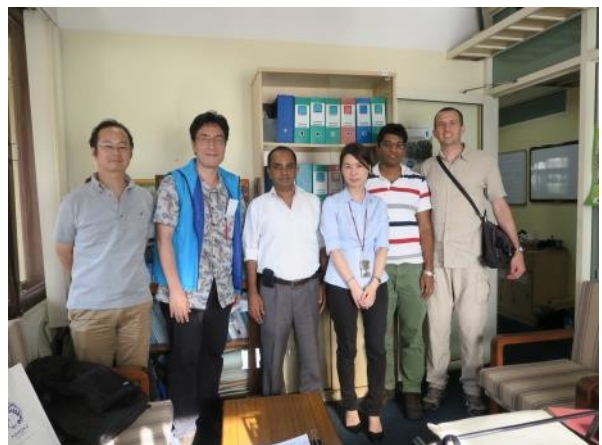
幸いにもネパール保健省大臣（中央）と面会できました。感染症やメンタルヘルスに対する今後のとりくみについて伺いました。



JICA によりトリブバン大学内に構築されている永住も可能な転居用モデルハウス



パタン病院の広いホールは黄色のトリアージエリアとして使用されました。中央は案内してくれた Dr. Pandey



UNDP ネパールオフィスにて開発と災害対策は切り離せないこと、ネパールの災害統計の現状について伺いました。



大型テントが立ち並ぶ空港近くの WFP ロジスティックスセンター。各クラスターから依頼された物資が運びこまれ、運び出されていきます。



カトマンズ近郊には田園地帯が広がっています。カトマンズの東約 20km にあるサンクウ地区をめざします。



歴史的に古い街で、非常に多くの建物が倒壊したサンクウ地区を現地の方々に案内していただきました。



多くの建物が焼かれていないままの煉瓦でできており、耐震強化がされていなかったことも被害を拡大しました。



震災前から井戸水は重要な飲料水でした。この井戸の屋根は倒壊して取り除かれています。



ガイドしてくれた方が住んでいるテント。自宅は 1 階をのこして倒壊し、がれきのなかから家族を救いだしたそうです。



上水道と下水道のパイプが交差しているところで配管トラブルのため掘り起こされています。重機が足りず、手作業で進められています。



またたくまに地域特有のモンスーンによる大雨が降りだし、道路は泥川のようにになります。

文責：江川新一（災害医学研究部門）